

追悼集『谷の鶯』翻刻と解題

白石, 悌三

<https://doi.org/10.15017/12152>

出版情報 : 語文研究. 37, pp.112-116, 1974-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

追悼集『谷の鶯』 翻刻と解題

白石 悌 三

悼

須磨の若木の楊貴妃ざくら、うしろの山の姥桜も、散にはもれぬ世の習ひ、誰かこれをさとさざ寛。されば高砂住の江の松は二□の□□□より相生の契りをむすび、いつのまにかしらの雪をいたゞき、尉と成、姥となり侍りし。かゝるめでたき世のためしの有に、我姥桜はつちのえ子閨陸月の三日の朝、東風にさそはれ老木はかなくむすおれ、尉ひとり柴の扉に残り、物うき夜半の松風に袖□□ほりて、

住はてし賤が妻戸の明くれをとふ人とは夜半の松かせ閨の調度の疎か成を見、住あれたる芭のもとと蘆山吹打しほれたるを見、いづれかなみだのたねならずといふことなし。

荒にけり妹が垣根の草も木も涙のたねはずみれのみかは初空月後の二日もくれんとして、いはく、我代々法花をたもてり、今これを辞して浄土門に入、尉と姥一蓮の上に座しなん、分のほるふも□の道のしげきのみぞとて、道本山靈岸寺の方丈学誉上人を招き奉りしに、即刻御駕をうながされ、念仏しゆは

うおはしまし、ことおはり、その夜かくこそ夢に見待ると語し。のり移る心の舟に棹さしてうかむ行衛はおなじ彼岸 爰にしろよし有方より、追悼の詩歌誹諧贈られし。とく遅く来り次第に書き侍る、その前後見ゆるし給へとぞ。

悼

宝永戊子閏正月上澣、隠士鈴木氏秋月之老妻臥疾不起、宛然易簀。余自幼相識之日旧。聞赴愕然。不堪感嘆、乃賦一絶以示秋月翁。 一別一生一夢過、空閨春靜、淚滂沱、匣中徒有縫殘袂、奈此寒來暑往、何

野桃原稿

悼

隠士秋月鈴木氏亡妻、 多年、心事自如、灰、 漠々愁雲去、復來、 淚雨春寒、一朵、梅、 閨情須引、羅浮夢、 永山氏養安

雪江野活

苦楽何事は何事 過現未来又何事

不知何事無何事 今捨何事求何事

おもひ出て咲梅が枝も心からさきのふにかわるけふの色香は

右はかれ左は茂る相生の松の心ぞほいなかるらん

松尾氏政矩

枕梅窓院

生死去来春夜夢

覺時畢竟費^レ茲身^レ

雨散雲収梅窓月

影照^レ千江^レ絶^レ点塵^レ

嶋田氏幸説

原 氏安適

残り居て歎く身ぞうき先立はとてもかくても夢の世の中

植置し若木の桜千枝さかふ花の姿をかたみとはみん

春の夜も長しとやするつれく^レとひとりふすまに思ひあか

して

松木氏重矩

奥村氏義豊

とふ人のそれだに有を老の身ののこるたもとの涙いかなる

移り行日数つもりのうらめしく波たちそひて袖やしほらん

木屋氏松怡

誹友過しころ愁に哀をもよふし、涙せきあへず、去年の春まで

ふたりして眺し花も、今は手向とや成なむ。

吉田氏賀角

吉田氏室女

なき人の髪は柳の芽枯哉

鹿の角もろくも落るいのちかな

声せぬを泣るゝ一つ帰雁かな

中く^レや片かし雛に余る膳

雌なし雉誰に着すべき羽袴

こぞのけふはたがひの齡を賀して桃の酒をことぶきしも、けふ

はその人のめい日と成はべれば、

時成かなけふは手向に雛のさゝ

おろか成智恵袋とぢたる口のほどきがたく、せめては尊靈の院

号を句の上^レにいたゞき、予がこゝろざしを述べ。

梅の花引接しるし東風

窓より香の煙り陽炎

院霞む三日の月もつゐ入て

散花の名や蓮台の夕霞

彼国の風も緩し春の夜

帰雁元船の帆にちらつきて

爰で見た桜や法の花経

吉田氏品少

谷村氏梅士

赤星氏巳角

法橋 不角

猪股氏母婦

松浦氏築水

兼古氏井蛙

安達氏口荆

難波住善方氏
聞てだに哀身に入東路の袖の時雨やほす日なからん

予に情ある人のむつまじき人なん、此春妻の世をさりしに、
愁にこもりいまそかりける。しるしらずいたまじみの言葉ども
よせあつめさせ給ける。予にもおもひ出ることの葉もあらばと
しきりに求めさせ給ふ。其人の名は聞て見参はし侍らねど、よ
そならぬ人の仰ごといなみがたくて、我も又三とせ過にし秋の
あわれおなじ思ひの露の色かはきもやらぬ袖をしほり、みだり
に水くきをととりて、

箕田氏憲貞
袖の上はとわれず向ぬ中がきのへだてはあらし露の哀は

雲州日置氏風長水

目貫にも花にもさすな片瀬貝

長専院良岡

山の端に立入雲の跡もなくきへし名残を夕ぐれの空

吉田氏寿泉

うつむくやなれも敷の桜草

同人 杏山

とひよるもぬれそふ袖や此春の花にさきだつ老の別を

唱

岡部氏方水

賢婦人掩粧

既並枕衾歲月長 一宵為夢臥孤牀

死生今古奈無遷 凶計云臻思斷腸

權も時から余所の歎まで

水間氏沾徳

鈴木氏の秋月翁妻におくれて、追善の和歌はいかいの句あつめ
給ふ。予も其数に望まれ侍て、

雲の花此時をこそあが仏

益田氏山夕

便ごとにてことなる事やなきかと耳を立る所に、世を去り給ふと
聞ぞかなしけれ。おどろき入たる余に筆をととりて、

予州住 西山氏紫水

不慮な告又寒帰る袂かな

夢は破りてのこる春風

旅衣軒端に落る朧月

岸本氏調和

かた羽なき胡蝶御力おとしなり

愛別離苦は常ながら、ことに稚よとの比しより鴛鴦のふすまさむむか
らぬ契りも、今はた老の波たつ床のうら淋しきまくらを撫給ふ
よし。我誹の師へ悼を需めらるゝのつるでに下官にも一句弔へ
と、うけたまわりていなみがたく、傍の門人にもかくとそ、や
き合て、両袖をしほり、呈 追幅

朧目に雄呂の鏡や片曇り

岸本氏和英 爪合

ふたつある閨む月、賢婦人敷処の袂を辞して永く黄泉よもに帰り去
り給ひぬ。今残んの画図はものいはず笑はずかし。悲歎の余り
追幅作善はいふにやおよぶ、誹諧は猶し志を演るやまと人のす
がたなりと、言ぐさのあまた種あつめ、硯の海の如渡得船、是

併追薦願写の心ばへなるべしや。予も其事を遥に聞て、

野本氏運菊

夕暮は何と蛙のもらひ泣

梅田氏治好

露は袖におきかわれども哀世にかたみにのこすおもかげも
なし

追善

大石氏石水

極楽の台に盛れ故人

来客予が愁傷の程を発句にせよと所望なれば、一夜軒秋月

消残る雪や嬌夫が身の属ひ

孝子鈴木氏康永拜題

萱堂一日罹病。氣宇不寧。雖換衛生之良午、菜餌無所
施、逾数月、竟厭栖櫓。余時從
主君平駿陽、湯菜無由嘗。況於侍、屬續之間乎。是
故、悶極之痛、類徹骨。悲歎之余、漸揮淚筆、賦禁律一
篇和歌一首、暫消遺憂悶云、

東関聖善病終ニ卒 哭泣吞声、叙挽詞、
聞説平生尋子、嘆 仮寝旅館、夢親、悲
顔容動止正、如見 言笑坐来疑在、茲
頼看、栢櫓為誰用、可憐遺物苦、憂姿、

おもひわく世のことわりもかきくらしともかくにもぬる
ゝ袖かな

宝永五戊子弥生日

連衆三十六人全

須磨の若木の桜、姥ざくらとかゝれしは、生死無常の枝葉まで
一からげにして、もしほ焼火にさしくべ、夕の煙を風になびか
し、跡かたもなく消去りし、いたましみのことならんかし。井
に、友とする人々の唐のやまとの言葉をつらね、あが仏の追悼
とし、其翁の歌をしめし給ふ。ふして是を見侍に、右を取左を
捨べき一句もなし。感吟斜ならず、ひそかに此集をぬすみ、桜
の板にちりばめ、谷の鶯と題して鳴音淋しき友とす。若、水く
きの世にながれなば、とうせきが嘲を請□んも口おしければ、
此つみをまぬかれんため、いみ名の字はのぞき侍る物ならし。

紫の雲の台の琴の音にうき世の夢やうつゝ覚けん

于時宝永戊子花飛日

(印)

武江書林須原平寿梓

〔解題〕

まず翻刻を許された所蔵者の中西啓氏に深謝申しあげる。翻刻には当用漢字を使用し、異体字は正体に改め、濁点・句読点を施し、明らかな誤脱は訂補した。裏打を施した改装本であるが、虫害部分も極力判読し、なお不可能な文字は□にした。

原本は一冊十九丁、中本型 (No. 84 X 23.5) の小冊子で、外題・内題・柱題ともないが、跋文によって「谷の鶯」と題されたことが判明する。宝永五年閏正月三日に永眠した一夜軒鈴木秋月の妻「梅窓院」の追悼集で、同年三月、江戸は日本橋須原屋平左衛門から刊行された。少数のいわゆる配り本であったためか、国書総目録にも記載がなく、他に伝本のあるを知らない。

孝子鈴木康永をふくむ三十六人の知友が、追悼の詩歌俳諧を寄せているが、灘波・雲州・予州と肩書のある三人以外はすべて江戸の連衆で、見られる通りの顔ぶれである。うち少くとも俳諧宗匠に関するかぎり、その関与する俳書に今のところ秋月の名を見出さない。気付いたところで「眩野後集」に同名の俳

人は見えるが、まず別人であろう。思うに編者の秋月は歌人・俳人というほどの人ではなく、詩歌俳にわたって風雅の交りを持つ数奇者の一人と断じてよいであろう。その子の康永が駿府勤番中で母を看とれなかったことを歎いているところから察するに、父の秋月も武士で、夙に退隠して「隠士」と呼ばれる境遇にあったかと思われる。江戸住ではあり、深川靈岸寺が菩提所ならば中級の幕臣でもあろうか。そうした人を中心とする通俗文化圏の一つの典型として紹介したもので、作品は型どおりの挨拶にすぎない。ただ、西鶴の「独吟一日千句」など亡妻追悼の先例はあるが、秋月の場合、老齢にしてなお愛惜の念はばかりなことなきは珍とすべきである。一般に頑なとまで言われる法華宗信者の老妻は、没前「一蓮の上に座しなん」ため浄土門に改宗したというが、告別式をキリスト教会で執り行われた未亡人の心ばえも偲ばれて、この追悼集一冊の翻刻を福田良輔先生の御霊前に捧げまつる、時は昭和甲寅花飛日。